

地域の伝統文化を題材とした教材の可能性について ～延岡小峰焼の事例から～

泰田 久史

Educational Materials of A Regional Traditional Craft

Hisashi Yasuda

要旨

子どもたちが暮らす地域の中にある資源を教材として活かすことの意義は大きい。「幼稚園教育要領」¹⁾では第1章第6「幼稚園運営上の留意事項」として「幼児の生活は家庭を基盤として地域社会を通じて次第に広がりをもつものであることに留意し、家庭との連携を十分に図るなど、幼稚園における生活が家庭や地域社会と連続性を保ちつつ展開されるようにするものとする。その際、地域の自然、高齢者や異年齢の子供などを含む人材、行事や公共施設などの地域の資源を積極的に活用し、幼児が豊かな生活体験を得られるように工夫するものとする」とある。同様に「保育所保育指針」²⁾においても第2章4(3)「家庭及び地域社会との連携」で「子どもの生活の連続性を踏まえ、家庭及び地域社会と連携して保育が展開されるよう配慮すること。その際、家庭や地域の機関及び団体の協力を得て、地域の自然、高齢者や異年齢の子ども等を含む人材、行事、施設等の地域の資源を積極的に活用し、豊かな生活体験をはじめ保育内容の充実を図られるように配慮すること」とある。

さらに「小学校学習指導要領」生活科³⁾の教科目標には「具体的な活動や体験を通して、自分と身近な人々、社会及び自然とのかかわりに関心を持ち、自分自身や自分の生活について考えさせるとともに、その過程において生活上必要な習慣や技能を身に付けさせ、自立への基礎を養う」とある。

これまで陶芸家として宮崎県延岡市にある古窯「小峰焼」の再生や普及活動に取り組んできたが、その過程において地域の伝統工芸品が、さまざまな角度から子どもたちの教材として活かせることを実感してきた。これまでの活動を振り返りながら教材として、さらには地方創生に寄与する可能性について考えてみたい。

尚、本文中に使用している写真1～13はいずれも著者撮影のものである。

1. はじめに

陶芸に関する活動が、図画工作にとどまらずに教材として多様な可能性を持っているのではないかと感じたのは平成元年頃のことである。

当時教員として勤務していた小学校は山を切り開いた場所にあった。校庭と接するその山肌には粘土質の赤土が露呈していたのであるが、ある日そこで子どもたちが作っていた「器」を見つけたのである。数日間観察していると昼休み時間に低学年の子どもたちがそこで粘土遊びをしていることがわかった。何気ない粘土遊びの一つであったが、普段過ごしている学校の中に生きた教材があると気がついた出来事であった。

子どもたちが使用していた粘土を観察したところ、いたるところで見られる地層と変りがない

ようであったが、粘性が強く、きめも細かい。授業の中でも造形活動には十分使えそうであった。陶芸を大学時代に経験していた私は「もしかしたら陶器にもなるのではないか」「耐火度が強くなっても素焼きの人形や縄文土器のようなものはできるかもしれない」と考えた。

幸い学校には電気窯があったので採取した粘土で簡易な形の器を作り、基本釉といわれる灰と長石をあわせた釉薬を掛けて 1240 度で焼成してみた。

すると、変形もほとんどない黒褐色の器ができたのである。(写真1)



校庭の粘土で作った茶碗
(写真1)

本格的な陶芸の材料としても十分に使えることが確認できたので、子どもたちの活動でも利用できるようにある程度の量の粘土を確保したいと考えた。

2. 教材作りの過程を通しての気付き

身近に教材として使える素材があることがわかったので、実際に安全に使える材料にするために粘土を精製することにした。

採取した土から粘土を作るにはいくつかの方法があるが、あまり道具を必要としない以下の①～⑦のような基本的方法をとった。

- ①採取した土を十分に乾燥させ、おおまかな石や木の根などを取り除く。
- ②土を細かく砕き、さらに細かな木の根などを取り除く。
- ③バケツなどの容器に水をはり、その中に土を入れて一晩ほど放置し土をとかす。
- ④よく攪拌して浮かんできた不純物を除く。
- ⑤しばらく放置した後に余分な水を捨て、沈殿した上層部の粘土を吸水性のある石膏型に入れ適当な固さになるまで乾かす。
- ⑥粘土を石膏型から取り出し、手で練り固さを均一にしながら空気を抜く。
- ⑦出来上がった粘土はビニール袋などに入れ保管する。

最初は図画工作の教材の一つとして使うことを考えていたが、実際に粘土を精選していく過程でさまざまな気付きがあった。図画工作だけではなく生活科や理科や社会にも関わる幅広い活用である。後述する延岡小峰焼の粘土作りも同様の工程を経る。

以下に①～⑦の粘土作りの工程を写真で示しながら教材としての視点を□に記入した。

① 採取した土を十分に乾燥させ、おおまかな石や木の根などを取り除く。(写真2)



採取した土には不純物が入っている場合が多くそのままでは使えない。まず乾燥させ、不純物を取り除く。

地質、地層 など

(写真2)

② 土を細かく砕き、さらに細かな木の根などを取り除く。(写真3)



主なものは石や木の根っこなどであるが場所によっては昆虫の抜け殻なども見られる。

植物や昆虫 など

(写真3)

③ バケツなどの容器に水をはり、その中に土を入れて一晩ほど放置し土をとかす。(写真4)



細かく砕くことによって水に溶けやすくなる。

土の性質 など

(写真4)

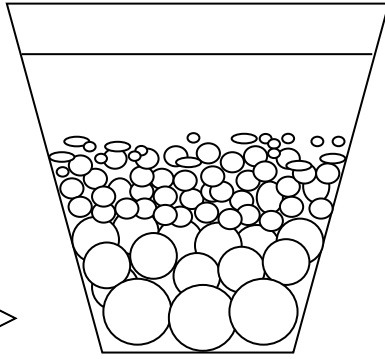
④ よく攪拌して浮かんできた不純物を除く。(写真5)



土は下に沈殿するが木の根や葉は上に浮かぶ。

浮力 など

(写真5)



<図 1 >

④の状態を表したのが図 1 である

大きな石などは底に溜まり、粒子が細くなればなるほど上層部に溜まる。上層の土を粘土に使用する。

比重や体積 など

⑤ しばらく放置した後余分な水を捨て、沈殿した上層部の粘土を吸水性のある石膏型に入れ適当な固さになるまで乾かす。(写真 6)



きめが細かくどろどろした粘土を移す。子どもたちがどろどろとした感触や乾燥が進み耳たぶくらいのやわらかさになった感触を楽しむ様子が見られた。

五感を使って楽しむ

(写真 6)

⑥ 粘土を石膏型から取り出し、手で練り固さを均一にしながら空気を抜く。(写真 7)



白木などべたつきのない台の上で「菊練り」し空気を抜く。

菊練りという伝統技法

空気が入っている状態で焼くと中の空気が膨張して陶器が割れる原因になる。

空気の膨張や収縮

(写真 7)

⑦ 出来上がった粘土はビニール袋などに入れ保管する。(写真 8)

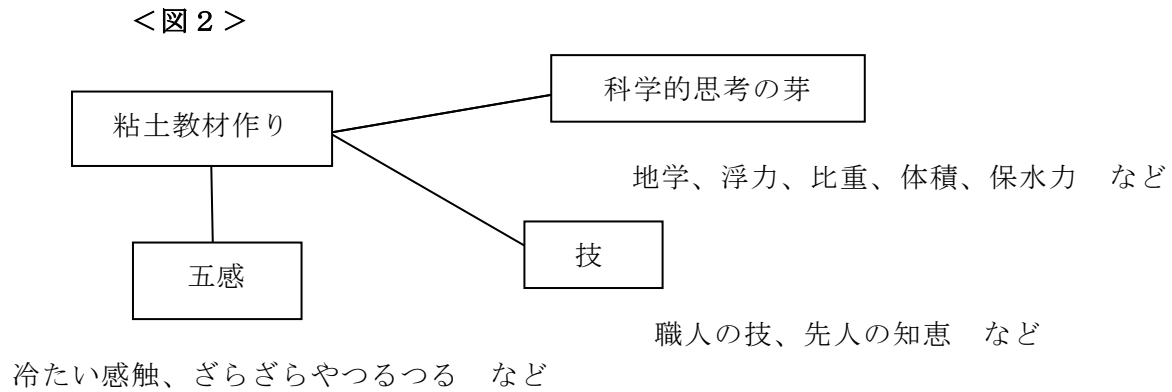


近年ビニール袋が使えるようになり、保管や移動がやりやすくなった。

昔の人の暮らし、先人たちの知恵

(写真 8)

粘土づくりをする過程で気付いた教材としての可能性を図2に表してみた。



3. 造形活動を通しての気づき

次に実際の粘土造形活動の中から気がついたことをまとめてみたい。

下の写真は当時の小学生新聞に掲載されたものである。(図3) あらためて活動を振り返りながら教材としての視点を□に記入してみる。



記事を読み直してみると、週に1回ある小学4年生から6年生が参加する「造形クラブ」での活動の様子が見て取れる。

異学年の交流

本格的な電動ろくろを使つての作品や手回しのろくろを使つての作品を作り、作品を展示するなどしている。

造形活動、伝統工芸の学習 など

<図3> 毎日小学生新聞 (1990年3月24日掲載)

製作した作品は大人の手によって素焼き(800℃程度)され、さらに釉薬を掛け本焼き(1250℃程度)を経て完成である。出来上がった作品は固く焼きしまり作ったときから15%程度小さくなる。

科学的变化

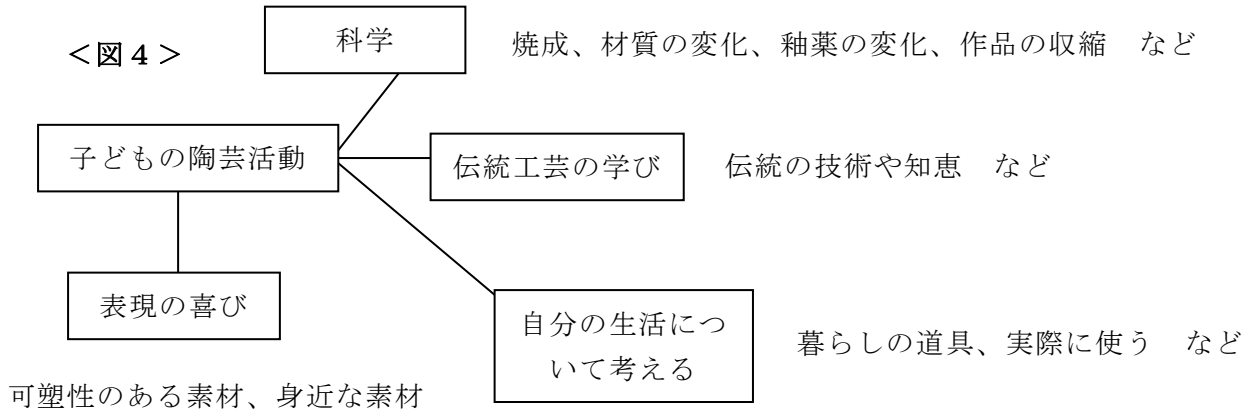
感触の変化

素材の特徴

出来上がった作品は生活の器として食事に使ったり、花瓶として花を生けたりできる。また、陶器は永続性があるため、作品が記念として残るという利点もある。

自分自身や自分の生活について考える

子どもの陶芸製作活動から広がる教材としての視点を図4に表してみた。



4. 伝統文化継承の活動からの気付き

平成 20 年から宮崎県延岡市の指定史跡「小峰焼窯跡」および「小峰焼」を調査・研究している。江戸時代にかかなり長い時間稼動し、庶民の暮らしに息づいていたやきものであるが、地元の人にもあまり知られておらず、普及活動を模索していた。

そのような状況の中、平成 26 年度から 2 年間、文化庁「文化遺産を活かした地域活性化事業」での取り組みの中で、多くの子ども達に陶芸と「小峰焼」を伝える機会をいただいた。^{4) 6)}

延岡市内の認定こども園が主軸となり、栃木県で、子ども達の陶芸指導に実績のある萩原芳雄氏（益子焼・伝統工芸士）と私が講師になり、市内の児童から高齢者までが陶芸での灯籠作り（1 年目）、陶板作り（2 年目）に挑戦した活動である（写真 9、10）

振り返ると現在注目されている SDG s を原動力とする地方創生の活動そのものであることが分かる。写真とともに活動の様子を説明しながら教材としての視点を□に示した。



伝統工芸士でもある陶芸家の陶器作りを見ている場面（写真 9）

- 他県との交流
- 世代間交流
- 保護者や地域の方同士の交流

（写真 9）



自分でデザインを考えながら陶芸に取り組む場面（写真 10）

- 粘土造形
- 素材の持つ特徴
- 技術の基盤

（写真 10）



子ども達が作った陶板は、地元の方が作った屏風に張り、前方にろうそくを灯して、夜の城山に展示され、多くの方に鑑賞された。

(写真 11)

伝統文化の啓蒙

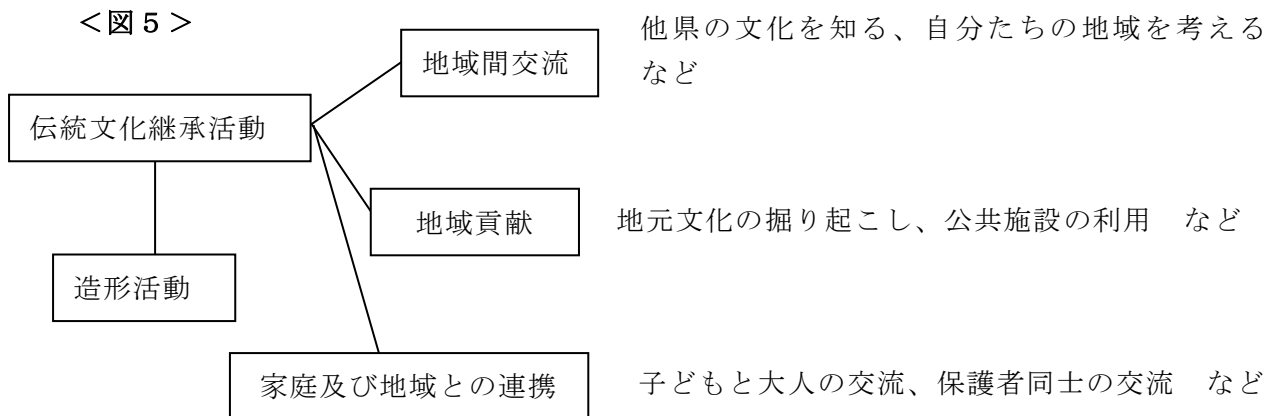
公共施設の活用

地域貢献

家庭及び地域との連携

野外共同屏風作品 (写真 11)

伝統文化継承活動から広がる視点を図 5 に表してみた。



5. 広がる地域創成の活動

最初は数人で始めた小峰焼再振興の取り組みは、小峰焼保存会の結成に繋がり、延岡市においても小峰窯址の看板の取り換え (写真 12) をはじめ、陶工の墓と伝わる場所への看板設置 (写真 13) など官民連携のプラットフォームとして理解と連携が進んでいる。⁵⁾



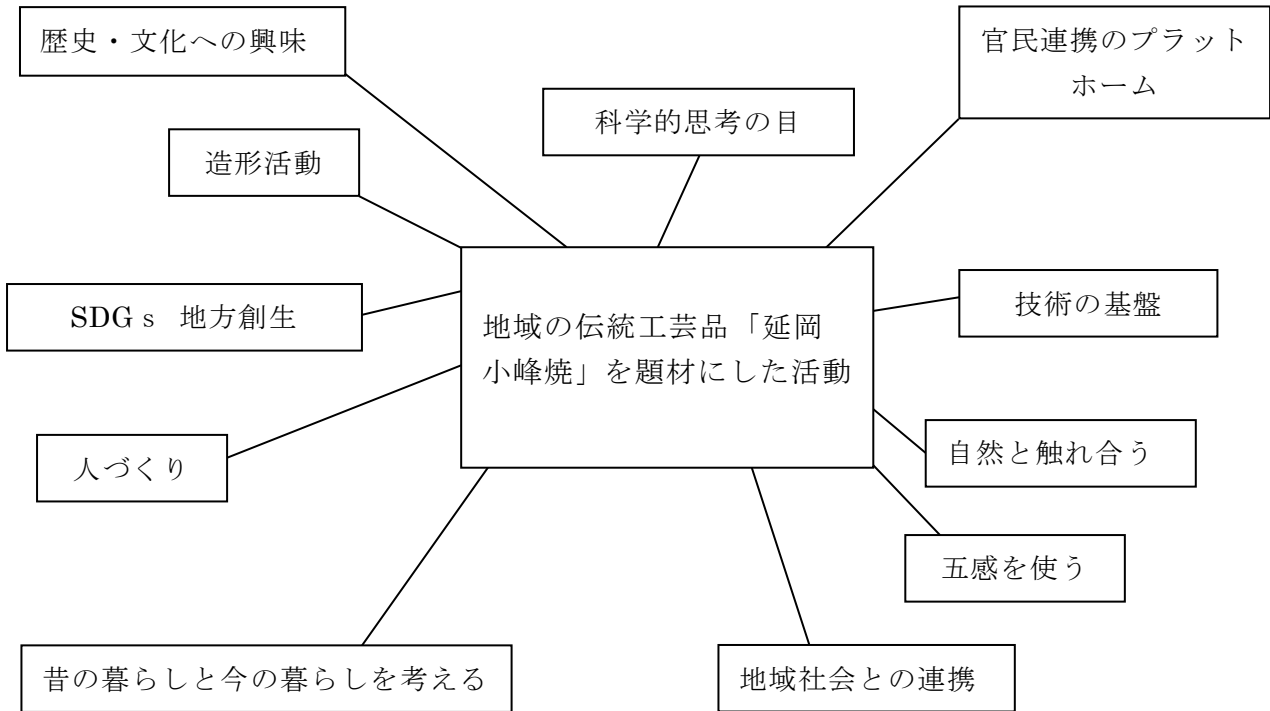
(写真 12)



(写真 13)

延岡小峰焼の活動が持っている教材としての広がり可能性を図 6 に表してみた。

<図 6>



6. まとめ

土という最も身近な素材が持つ可能性の深さと広がりを改めて感じている。土から粘土を作るという過程では、科学的思考の芽を育てる内容が多く含まれていることを感じた。また、可塑性に富む粘土という素材は、子どもたちが楽しんで活動しながら、主体的に創造性を育てる教材でもある。

さらに、地域資源でもある伝統工芸品「延岡小峰焼」を活動に取り込むことによって、地方創生・SDGsにも繋がる大きな可能性を感じることができた。

加速するデジタル社会の中で、リアルな体験をする意味は大きさを増していると思う。リモートワークやオンライン授業が増加する中で、人の成長と人・もの・ことの多様な関わりの持つ意味を再考しなければならないと考える。

具体的な取り組みとして紹介した「延岡小峰焼」の展開はまだ始まったばかりである。これから地元の方々をはじめ、行政とも連携しながらこの取り組みを育てていきたい。

7. 引用・参考文献

- 1) 幼稚園教育要領
- 2) 保育所保育指針
- 3) 小学校学習指導要領 生活科
- 4) 泰田久史 2015 伝統工芸継承の取り組み 教育研究 79～82 頁 宮崎学園短期大学
- 5) 泰田久史 2016 小峰焼（延岡内山焼）の研究 教育研究 43～46 頁 宮崎学園短期大学
- 6) 泰田久史 2017 子どもの粘土造形指導の取り組み 教育研究 35～38 頁 宮崎学園短期大学